

つながる先をつくることの意義

—鉄道サークルの学童保育実践を通して—

林 幹士

キーワード：学童保育実践、つながる先、エピソード記述

1. はじめに

つながる先へと案内する：2009年10月21日（水）

（背景）

保育スタッフのなべちゃんが、「最近、角川君（1年生）がクラブ（学童保育所のこと）に帰ってきて、一人で横になって本を読んでいることが多いよな。いろいろ声をかけて一緒にあそぼうとしてるんだけど、おれはいいよって断るんよ。なんかいい方法ないかな」と私に声をかけてきた。なべちゃんには、角川君に少しでも友達と楽しくあそんでほしいという思いがある。また、なべちゃんによると、角川君は「クラブで友達と一緒にあそびたいんだけどなあ」と、自宅で母親にもらしているようであった。

私は「角川君のしたいことを尋ねてそれを一緒にすることや、いつもとは違うあそびに誘うことで興味を持つのではないか」となべちゃんに伝えた。なべちゃんは角川君を、あの手この手であそびに誘うことを数日間、試みた。角川君は、ときどきあそびに加わるが、長く続かず「おれは、本を読んでいるからいいよ」と本を読み始めるようだ。

なべちゃんは、自身でこれ以上角川君を誘い続けるのもあまりよくないのではとの思いから、私に角川君へと働きかけてほしいと声をかけてきた。私は角川君が鉄道サークルの会員であることから、鉄道サークルを通してあそびに参加できるかもしれないと考えた。そこで、臨時の鉄道サークルを開くことにした。

私は鉄道サークルの案内チラシを作成した。チラシには、日時・場所・議題・参加メンバーについて書いた。サークル会員と、最近友達と一緒にあそんでいる場面が少ないと、保育者がかんじている子どもへのチラシを準備し、その子どものロッカーにはっていった。

（エピソード）

授業を終えた子どもが、「ただいま」と元気よく次々にクラブへと帰ってくる。そして、ランドセルをしまおうとロッカーへとむかう。ロッカーにはられたチラシを目にした子どもからは、「あー、なんかロッカーについとる」「あー、おれのところにもついとる」「〇〇君のここにはついていない」等と声があがっていた。

私は帰ってくる子どもに「お帰りー」と声をかけながら、角川君の帰りを心待ちにしていた。しばらくすると角川君が帰ってきた。私が「お帰り」と声をかける。「ああ、うん」と角川君は頷いていた。そして、角川君はランドセルをしまうために、自分のロッカーへとむかった。

角川君は、ロッカーにはられたチラシにすぐに気づいた。「鉄道サークル」と、角川君は思わず声を出して驚いていた。チラシを手にしてひろげると、書かれた文字をじっと見つめている。私は少し離れた所から、角川君の反応を見ていた。角川君は「鉄道サークル臨時集会・・・」とチラシを読み始めた。「あー、鉄道サークルのことか」といった様子で、チラシの内容を確認しているようだ。

そして、サークル開始時刻。どの鉄道サークル会員よりも先に集合場所に来ていたのは、角川君だった。

このエピソードでは、友達とあそびたい思いを持ちながらも、自ら友達に「一緒にあそびたい」と言えずにいる角川君を、鉄道サークルへと案内することを示した。角川君は「クラブで友達と一緒にあそびたいんだけどなあ」と母親にもらしていた。子どものこのような気持ちを、保育者は見落としてはならない。

学童保育において、自由あそびの時間に何をしてあそべばよいのかわからず、友達とあそびたくてもうまくあそべていない子どもは少なからずいる。このような子どもをまえに、保育者として様々なアプローチを試みながら日々の保育がなされている。筆者は、子ども同士のつながりをつくりだすような学童保育実践を意識して取り組んできた。それは、子どもに他者とのかわりを通して、楽しい体験をしてほしいからである。そして、ここでの体験が子ども同士の育ち合いにつながっていくと考えている。

つなぐ保育の必要性について、佐藤暁は、子ども自身が仲間とつながることを望んでいるからであるとし、子どもをつなぐときのポイントとして「つなぐための支援を心がけること」と「つながる先の確保」の2つをあげている¹。また、小川博久は「身体的に作業や場を共有することで、人間関係が形成されていくのである。その意味で遊びを通して、活動を共有したり、場を共有することは、後の人間関係作りの原点なのである」としている²。筆者が、これまでに取り組んできた子ども同士のつながりをつくりだすような学童保育実践の一つが鉄道サークルである。

本研究では、つながる先としての鉄道サークルの学童保育実践をエピソードとして記述することと、記述したエピソードからつながる先をつくることの意義について検討していくことを目的とする。

2. 研究方法

(1) フィールドの概要

フィールドである学童保育所では、1年生から3年生までの児童を中心に、4年生以上の児童も受け入れている。実践期間である2005年4月以降の在所児童数は、90人前後であった。また、小学校の長期休み期間のみの利用児童を含めると120人前後となっていた。

保育者の数（年度や時期によって異なる）は、10人前後である。ローテーションにより、一日7・8人の保育者で勤務している。

(2) 筆者の参与のありかた

筆者は、保育者として鉄道サークルの一会員となり参加している。活動内容は、筆者が事前に準備した。そして、鉄道サークル会長³を中心に進められるようにした。鉄道サークルが子ども同士のつながる先となるように、可能な限り子ども同士で活動できるように支援した。

保育の中の大切なこととして、宇田川久美子は「子どもが『共に』の世界をつくり出していくことを支える他者の存在です。その他者とは、子どもと視線を『共に』して子どもの抱く世界を『共に』味わい、楽しみ、子どもと身体感覚を『共に』して子どもの抱く世界を実感として納得し、その上で、子どもと協働して『共に』の世界をつくり出していく共感的他者⁴である」としている。これをふまえ、筆者は共感的他者としての保育者を意識して実践を展開していった。

(3) 方法について

本研究では、エピソード記述⁵による研究方法を用いた。エピソード記述について、鯨岡峻は「間主観的に把握されるものこそエピソード記述の中心になるもの」としている⁶。また、佐藤暁は、自らが子どもを指導する場面での記述について、研究者／実践者が提供する「指導」という子どもへの働きかけによって生成される「子どもと共同で創造する経験」が、「子どもの意識に現れる経験」と「私の意識に現れる経験」との結び目になっているとし、その結び目で現出する経験を記述していくことで、子どもの経験世界にアプローチしていくとしている⁷。本研究では、鉄道サークルの学童保育実践における子どもの経験世界を、エピソード記述により描いた。

3. 本実践の概要

本実践における鉄道サークルは、2005年4月に発達障がいのある1年生の村田あつき君が、入所してきたことをきっかけとして始まった。あつき君と保育者である私とのかかわりをつくることを意識し、あつき君の好きな鉄道をあそびに取り入れることで展開していった。開始当初は、あつき君と筆者が電車の絵を描いたり、鉄道の本を一緒に読んだり、電車ごっこあそび等をしていた。そこへ、周囲にいる子どもが興味を持ち、一緒にあそぶといった状況であった。2009年10月以降は、冒頭の角川君のエピソードをきっかけに、月1回を目安に取り組んでいる。

実践を通して、子ども同士がつながっていく場面が見られるようになった。子ども同士がつながるために、佐藤暁は「なんらかの『媒介』⁸が必要」としている。本実践における媒介は、鉄道サークルである。これをふまえて、子ども同士をつなげる学童保育実践ということを意識的に取り組んでいった。

また、矢野智司は「我を忘れて夢中に遊んだり、美しい音楽に心を奪われたとき、あるいは時間を忘れて森を散策したりしたとき、いつのまにか私と私を取り囲む世界との間の境界が消えていくといった体験をしたことがないだろうか。優れた体験では、このように自己と世界とを隔てる境界がいつのまにか溶解してしまう。このような体験を溶解体験とよぶことにしよう」としている⁹。子どもにとって鉄道サークルが、溶解体験のできるあそびとなるように、保育者が活動内容を工夫していきながら学童保育実践を展開していった。あそびにおいて、子どもがいかに夢中になれるのかが大切であると考えている。

鉄道サークルは、鉄道好きな子どもを中心に活動している。鉄道サークルは、自由あそびのなかに位置づけている。定期的に活動したい子どもは、鉄道サークル入会申込書を記入後、鉄道サークル会員となる。それ以外の子どもは、その日、活動してみたいと思えば臨時会員として参加している。

4. 結果と考察

エピソード①「えー、おれ友達、おらん」：2011年4月13日（水）

（背景）

入学式のため学校が休みとなった2年生から5年生までは、1日保育であった。朝一番に三浦会長（4年生）が、「今日サークルやろ」と私に声をかけてきた。私は「うんー、そうじゃなー、でも今日1年生もいないし、お休みの会員も多いし、何をするかも準備してないからなあ」と三浦会長にかえした。「じゃあ、明日しようや」と三浦会長。「うんー、明日か、でも、何をするかも決めてないからなー」と私。「でも、大丈夫じゃろう、そろそろした方がええんじゃねー」と三浦会長。三浦会長のサークルをしたいというあつい思いにこたえようと、「うんー、わかった、じゃあ、とりあえず今日のあいた時間に、角川会長（3年生）と松井会長補佐官（3年生）と三浦会長で緊急幹部会をしようか」と私は提案した。そして、鉄道サークル緊急幹部会でのことである。

（エピソード）

緊急幹部会のテーマは、鉄道サークルの今後の日程と活動内容についてであった。活動内容の1つである鉄道検定の内容について、話を進めていた。4人それぞれが検定内容について、様々なアイデアを出していた。私が検定内容の1つとして「友達と鉄ジャラ（鉄道のドンジャラ）をするっていうのは、どうかな？」と提案した。

すると、表情を曇らせた角川会長が、「えー、おれ友達、おらん」とポツリと呟いた。すぐに、私は「えー、おるがー」と言いながら、松井会長補佐官の方を指さし、次に「トイレに行ってくる」と席をはずしていた三浦会長の座っていたイスを指さし、最後に私の方へと指をむけた。そして、角川会長へむけてうん、うん、と頷く仕草をしてみせた。この仕草にあわせて、松井会長補佐官もニコニコしながら、角川会長の方へとむいて同じように頷いていた。すると、角川会長は「あー、そうか」といわんばかりの表情を浮かべていた。

(考察)

私が鉄道検定内容の1つとして、友達と鉄ジャラをすることを提案した。これは子ども同士をつなげるためのものである。友達という言葉にすぐに反応した角川会長は「えー、おれ友達、おらん」と呟いた。角川会長は、友達がいないと思っているため、それが鉄道検定の内容に加わると困るということだろう。このときの言葉からは、角川会長にとって友達と思えるような人が、学童保育所にいなかったことがうかがえた。

私は、角川会長のことを友達だと思っている人がいることを、角川会長に伝えようと考えた。それが、私の一連の言動となっている。これによって、松井会長補佐官や三浦会長が友達であるということを、角川会長に示すことができた。また、松井会長補佐官のニコニコと頷きながらの表情からは、僕は角川会長のことを友達と思っているということが角川会長に伝わっていた。

このエピソードからは、角川会長のようにつながっていることに気付いていない子どもがいることがわかった。一緒に鉄道サークルの活動をしながらも、友達ということを認識していなかった角川会長。「あー、そうか」といわんばかりの角川会長の表情からは、角川会長自身の友達観というものが揺らいだとともに、ほっとしていることが見てとれた。この安心感は、角川会長が友達の存在をかんじることでうまれてきた。角川会長は、自身のことを友達だと思っている人が、周りにいることに気付くことができたのである。

エピソード②鉄道サークルへと集う：2011年4月28日（木）

(背景)

この日は、2011年度の鉄道サークル第1回目の日である。活動時間は、おやつ後の自由あそびの時間に設定していた。鉄道サークルの案内チラシを、クラブ室内の壁面に事前に掲示していた。

中学校の授業を終えた村田あつき元会長（小学校6年間鉄道サークル会長を務めた）が、後輩の様子をあたたかく見守りにきてくれていた。2011年度鉄道サークルを会長としてひっぱり手してくれるのは、角川会長（3年生）と三浦会長（4年生）である。

おやつの時間、村田元会長と角川会長が声をあわせて、「このあとは、鉄道サークルがあります。やりたい人はぜひ来てください」とおやつを食べている子どもへと呼びかけていた。事前

にアナウンスしておくことで、一人でも多くの参加者が来てくれればという思いがある。おやつ時間を終えて、いよいよ鉄道サークルが始まるときのことである。

(エピソード)

鉄道サークル開始 10 分前。おやつ時間にアナウンスしたものの、参加してくれる子どもがいるのかどうか、少し不安になった私は「角川君と一緒に、運動場であそんでいる子どもに鉄道サークルが始まることをもう一度伝えてきて」と村田元会長に声をかけた。すると、村田元会長は「角川一、どこおる、おーい角川一」と声をかけ、角川会長を見つけると「よし、いくぞ」と二人で運動場へと出て行った。鉄道サークル開始時刻が近づくにつれて、鉄道サークルに参加したい子どもが、ぞろぞろと集まり始めた。周囲にいた子どもは、何が始まるのか興味津々の様子である。

鉄道サークル開始時刻。鉄道サークルの活動場所には、10 人の子どもの姿があった。角川会長と三浦会長と村田元会長の 3 人は、司会・進行を務める。1 年生の佐野君と白井君の 2 人は、「あつきたちに誘われたで」と笑顔で運動場からクラブ室内に走って入ってきた。1 年生の鳥山さん、2 年生の鎌井君、斎藤君、藤井君、3 年生の池山君の 5 人は鉄道サークルの始まりをいまや遅しと、鉄道サークルが早く始まらないかなといった表情を浮かべながら待っていた。鉄道サークルの活動場所に集まってきた子どもは、何が始まるのかを楽しみに待っていた。子どもの表情からは、ワクワクとした期待感が私に伝わってきた。

鉄道サークル開始直後。この光景を見ていた 1 年生の安井君が「僕もやりたい」と、鉄道サークルの輪のなかに入ってきた。そして、三浦会長からこの日の活動が会員たちに伝えられ、11 人での鉄道サークルが始まった。

(考察)

このエピソードでは、鉄道サークルへ子どもがどのようにして集うのかを示した。ここでは、以下の三つによって、子どもが集まっていることが示された。

一つ目は、周囲にいる子どもが、何か楽しそうなことが始まりそうな雰囲気引き寄せられるということである。鉄道サークル開始直後に「僕もやりたい」と安井君が参加してきた。サークルを実施するテーブルの周りに子どもが、ぞろぞろと集まってくる様子を見て思わず参加したくなったのである。これは、何か楽しそうなことが始まりそうな雰囲気が、安井君に伝わったからである。

二つ目は、子ども自身が興味や関心をもつことである。ただ、保育者はこの興味や関心を高めるためのしなかけを準備しなくてはならない。鉄道サークルの案内チラシを事前に掲示しておくことや、鉄道サークル開始前のおやつ時間にアナウンスをしておくことである。また、サークル開始直前には、村田元会長と角川会長に鉄道サークルへの参加を呼びかけてもらった。これらのことで、参加したい子どもの興味や関心を高めることができた。

三つ目は、子どもが子どもに誘われて参加してくることである。ここでは、保育者が意識的

に、子ども同士で声をかけるように促している。これは、子ども同士で誘いあうことを経験してほしいという思いがあるからである。村田元会長と角川会長に誘われた佐野君と白井君の2人がやってきた。2人は「あつきたちに誘われたで」と嬉しそうに言いながら、鉄道サークルへと参加してきていた。

エピソード③月に一度のお楽しみ：2011年5月10日（火）

（背景）

雨のため運動場が使えず、子どもは体育館であそぶことになった。体育館へとむかう途中、角川会長（3年生）を見つけた。先日、角川会長を含め、緊急幹部会において2011年度鉄道サークル活動実施日を、毎月第3木曜日と決めていた。これを角川会長が覚えているのかどうかを、私が確認しようとしたときのことである。

（エピソード）

私が角川会長の後ろから「なあなあ、次のサークルの日いつか覚えてる？」と声をかけた。角川会長が「うん、えーと、いつだったかな」とこたえた。私はややがっかりしながら「えー、覚えてないん、次は、5月19日、何曜日かは覚えてるよな」と尋ねた。角川会長は「えーと、水曜日だったかな」と確認するように聴き返した。私が「5月19日のも・く・よ・う・び、毎月第3木曜日って決めたがあー、大丈夫、会長、頼むよ」と次のサークルの日と曜日を、念を押すように確認した。

すると、角川会長は自信に溢れた表情を浮かべながら「うん、でも、大丈夫だって」と言った。突然自信たっぷりになった角川会長に、私はやや驚きながら「え、そうなん、なんで」と聴き返した。角川会長は「うん、だって、それはさあ、ちゃんとカレンダーに書いてあるから」と余裕の表情を浮かべながら教えてくれた。

後日、降所指導の際に角川会長の家の近くまで行ったときのこと、角川会長がカレンダーを見せてくれた。そこには、5月19日の19という数字を電車の絵で囲み、その下に鉄道サークルと書いてあった。

（考察）

残念ながら角川会長は、次回の鉄道サークル活動実施日を覚えていなかった。これについて、私は少しがっかりしてしまった。しかし「ちゃんとカレンダーに書いてあるから」という言葉を聴いた瞬間、私はとても嬉しい気持ちになった。それは、月に一度の鉄道サークルをとても楽しみにしてくれていることが、私に伝わってきたからである。カレンダーに鉄道サークルと書き、その日が近づいてくるのを心待ちにしているのである。

保育者として、楽しい活動を用意しておくことの大切さがわかる。学童保育所に来てこれをしてほしい、これをする日があるから学童保育所が楽しい、こんなふうに思ってもらえるような活動を、準備しておかなければならない。子どもの楽しみをつくるということが、保育者の大切

な役割の一つである。

活動そのものへの興味・関心は子どもによって異なる。一人でも多くの子どもが楽しいと思えるような活動を把握し、それを展開していくことが重要となる。そして、そのような活動が、月に一度でもあれば、子どもは、それを楽しみに日々過ごすことができる。

エピソード④いい考えのこと：2011年6月6日（火）

（背景）

安井会員（1年生）は、鉄道はもちろんのこと、仮面ライダーも好きである。そんな安井会員のはずんだ声が、遊具のあたりから私にむけられた。このとき私は、サッカーをしている子どもの輪に入っていた。

（エピソード）

「まあぼ（筆者の愛称）、まあぼ、ちょっと来て」とサッカーゴール裏にある遊具のあたりから安井会員の声。「何？いまゴールキーパーしているから、安井君がこっちに来て」と私が返事をした。

すると、安井会員が私のもとへとやって来た。私が「どうしたん」と聴いた。「あんなー、いま鉄道サークルしとるじゃろ、で、それで、それで、それが終わったら、仮面ライダーサークル」と安井会員の声が、勢いよくはずんだ。一瞬、何のことかわからなかったが、鉄道サークルと同じように、仮面ライダーを通して、何かをしたいのだと思った。私は仮面ライダー好きな保育スタッフがいることをふと思い出し「あー、仮面ライダーサークルか、それも、いいなあ、あ、そうだ、まあぼの友達（仮面ライダー好きな保育スタッフのこと）に仮面ライダーの好きな人がいるから伝えとくわ」とこたえた。

次の日。私が「安井君、昨日話していた仮面ライダーサークルについてなんだけど、まあぼの友達にも伝えといたよ」と学校から帰ってきた安井会員に声をかけた。「いやあー、いい考えのことを言ったじゃろう」と嬉しそうな声で安井会員がすかさずこたえてくれた。

（考察）

このエピソードは鉄道サークルをきっかけとして、子どもから新たなあそびの提案がなされたことを示している。「あんなー、いま鉄道サークルしとるじゃろ、で、それで、それで、それが終わったら、仮面ライダーサークル」という安井会員の言葉は、新たなあそびの提案である。鉄道サークルをしていくうちに、安井会員は仮面ライダーサークルをしてみたいと考えた。仮面ライダーサークルには、仮面ライダー好きな子どもが集まってくる。これによって子ども同士の新たなつながりができていく。

それでは、仮面ライダーサークルを安井会員が提案できたのはなぜだろうか。それは、鉄道サークルで、友達と一緒にあそぶことの楽しさに気付いたからである。自分のしたいあそびを表現し、それに一緒につきあってくれる他者を求めている。次の日、安井会員の提案を別の保

育スタッフに伝えたことを安井会員に話した。安井会員は「いやあー、いい考えのことを言ったじゃろう」と、とても満足した様子であった。子どものしたいことを、いかに支援していくのかが、保育者には求められている。

エピソード⑤「あー、ほんなら、それでええが、それでいこう」：2012年11月28日（水）

（背景）

鉄道サークルでは、年末にステージ発表を行っている¹⁰。会員が好きな電車を段ボール電車として作成する。好きな路線を選び、いくつかの駅において運転士役と車掌役の会員がクイズを出題する。クイズに正解した子どもが、段ボール電車にお客さんとして次々と乗車していく。そして、終点の駅で景品がもらえるというものである。

27日に、鉄道サークル会員たちは、ステージにむけての打合せを行った。私が「鉄道サークルのステージをやりたいかどうか」と会員たちに尋ねた。「やるやる」「やりたい」と会員たち。私が「どんなステージにしたい」と聴くと、「去年したようなかんじでいいんじゃない」と会員たちの声があがった。私が「じゃあ、どこの路線や車両にする」と尋ねると「おれは、山手線がいいよ」と福山会員（2年生）。「新幹線がいいんじゃない」と松井会長（3年生）。「玉手箱列車がいい」と鳥山会員（2年生）。私が「じゃあ、どの列車にする」と尋ねる。互いに譲らずどの列車にするかなかなか決まらない。そこで、私が「じゃあ、もう全部すりゃあ、ええがあ」と提案。「そうじゃな、そうしよう」と会員たちは納得した様子。

続いて、それぞれの役割についての話し合い。この列車のなかから新幹線を選んだ松井はると会長。私が「はると、誰と一緒に新幹線を担当したい？」と聴くと「おれは、吉本と一緒にしたいんよな」と、この日クラブを休んでいた吉本会長（3年生）の名前をあげた。

この翌日、私が松井会長と一緒に、鉄道サークルステージの話について、吉本ひかるの会長に伝えているときのことである。

（エピソード）

私が「ひかる、昨日の話し合いはステージについて決めたんよ。それで、電車が山手線と新幹線と玉手箱列車の3つあって、そのなかでどれがしたい」と聴いた。すると吉本会長は、「あー、え、松井はどれにすることにしたん」と隣で、一緒に話をしてくれていた松井会長にすかさず尋ねていた。松井会長が「うん、おれは、新幹線をしようと思う」とこたえる。このあとに続けて、「吉本、一緒にしよう」と声をかけるのかと思ったが、はずかしそうに口をつぐんだ。松井会長は自分の言葉で、吉本会長と一緒にしたいということを伝えられずにいるようだ。

そこで、私が「あんなー、ひかる、昨日のことなんじゃけどな、どの電車にするかを話し合っていたときに、みんなどれにするって順番に聴いたんよ、そしたらそのとき、はるとは『おれは、吉本と一緒にしたいんよな』って言っとったでー」と吉本会長に伝えた。その瞬間「あー、ほんなら、それでええが、それでいこう」と、口元をゆるませながら吉本会長の声ははず

んだ。その横で、松井会長は少しはずかしそうに、はにかんでいた。

(考察)

このエピソードでは、自分の思いを相手に届けることが苦手な子どもの思いを、保育者である私が伝えていることを示した。このような子どもを他者とつなぐためには、場合によっては保育者が代弁することも大切である。

松井会長の「おれは、吉本と一緒にしたいんよな」という言葉を、直接聴くことはできなかった吉本会長。翌日、松井会長の口から再び伝えてほしかったのだが、恥ずかしいのか伝えにくそうにしていた。そんな思いに気づいた私は、吉本会長へと松井会長の思いを伝えた。「吉本と一緒にしたいんよな」という松井会長の言葉には、この人じゃなければだめだという思いが込められていた。私が松井会長のこの言葉を伝えると、吉本会長はとても嬉しそうな表情を浮かべていた。

「あー、ほんなら、それでええが、それでいこう」という吉本会長の言葉からは、嬉しさが溢れでていた。それは、松井会長から必要とされている思いが吉本会長に伝わったからである。

エピソード⑥「あっ、上手」：2013年5月7日（火）

(背景)

4月から鉄道サークルに入ってきた桐山会員（2年生）。鉄道のことはあまり知らない。桐山会員は自由あそびの時間になんとなく、手持ちぶさたな時間の隙間をうめるかのように参加している。このような子どものためにも、楽しく過ごし、子ども同士のつながる先を提供したいとの思いから鉄道サークルを展開している。

(エピソード)

「なあ、なあ、まあぼさん（筆者の愛称）電車のことあんまり知らんでもえん」とこの日の活動に参加しようかどうか迷っている桐山会員が声をかけてきた。私が「うん、いいよ。電車のこと好きじゃなあという気持ちがあればできるよ」とこたえた。すると、桐山会員は電車の本をパラパラとめくりながらしばらく眺めていた。

「のぞみにしよう」と、描きたい絵を決めた桐山会員。「しんちゃん（桐山会員のこと）、知っとんじゃがー、電車のこと」と私。すると、桐山会員は表情をゆるませながら「のぞみにした」と絵を描き始めた。

桐山会員が描き始めてしばらくすると、松井会長（4年生）が「あっ、上手」と桐山会員の描いている絵を指さした。私が「しんちゃん、上手だって」と松井会長の言葉を、もう一度桐山会員に届けた。このやりとりに、さらに「しんちゃん、うめーがー」と池山会員（5年生）。「まあ、上手に描いてな、ていねいにな」と私。周囲の子どもからほめられた桐山会員は、嬉しそうな表情を浮かべながらのぞみを描き続けた。

「できた」と桐山会員。私は「しんちゃん、できたん、今日の鉄道サークルについて、どう

だった」と桐山会員に聴いてみた。桐山会員は「おもしろかったけー」とこたえた。さらに、私が「何が」と聴くと、桐山会員は「描くのが」と教えてくれた。

(考察)

この日の活動に参加しようかどうか迷っている桐山会員が、声をかけてきた。この言葉を聴いた私は桐山会員に、この日の鉄道サークルの活動に参加してもらいたいと考えた。それは、鉄道サークルに参加することで、つながるきっかけをつくることができるからである。

そこで、できる限り桐山会員が参加しやすいように、私は「うん、いいよ。電車のことが好きじゃなあという気持ちがあればできるよ」と声をかけた。また「知つとんじゃが一、電車のこと」という声かけは、電車のことをあまり知らない桐山会員に、自信を持たせることができた。保育者がこのような場面で、子どもが参加したくなるような言葉かけを、いかに行うかが大切なのである。

この日の活動は、一人ひとりが好きな電車を描く個別の活動であった。このような個別の活動においても、子ども同士をつなぐことができる。それは、それぞれの描く作品を通して、そこに会話が生まれるきっかけとなるからである。松井会長の「あっ、上手」や池山会長の「しんちゃん、うめーが一」と、思ったことを素直に桐山会員に届けてくれているのが心地よかった。これに桐山会員は、笑顔でこたえていた。周りの子どもが互いのことを、よく見ているのだなあとかんじた。

桐山会員の「おもしろかったけー」「描くのが」という感想からは、桐山会員自身も活動に満足していることがわかる。そして、自分の描いた絵が周りにいた子どもから次々とほめられたことが、なにより嬉しかったのである。

5. 総合考察

以上のエピソードの考察をふまえ、鉄道サークルの学童保育実践を通して、つながる先をつくることの意義について五つをあげる。

一つ目の意義としては、自らの力で他者とつながることが苦手な子どもを、つながりやすくすることである。このような子どもは、友達と一緒に何かを始めることは難しい。つながる先があれば、自分からあそびを展開することや自分からあそびのグループに入ることをしなくてもよい。設定されたあそびに自分の身を置くことができれば、そこに参加してきている子ども同士でつながっていくことができる。つながる先があることは、自らの力でつながることが苦手な子どもにとって、他者とつながろうとする負担を軽減することになる。

また、つながりやすくするための要素としては、自分に加わろうとしているあそびに、共感的他者の存在が欠かせない。エピソード①・⑤・⑥では、共感的他者の重要性が示されていた。子どもは、自分自身を受け止めてくれる友達・保育者がいることや自身が必要とされる経験等

を通して、つながっていくことができるからである。

二つ目の意義としては、保育の場を楽しそうな雰囲気を生み出すことである。エピソード②では、鉄道サークルに子どもが集う際に、周囲の子どもにも楽しそうな雰囲気が伝わっていた。この楽しそうな雰囲気に引き寄せられた子どもが参加し、新たなつながりを生み出す。このような雰囲気を生み出すには、子どもがワクワクするようなあそびでなくてはならない。

三つ目の意義としては、子どもに楽しみを与えていることである。エピソード③では、角川会長が、月に一度の鉄道サークルをとて楽しみにしてきていたことがわかった。子ども同士がつながるためには、子どもに楽しみだと思ってもらえるようなあそびであることの重要性がわかる。

自由あそびの時間、好きなあそびに没頭している子どもは、楽しいからそのあそびを選んでいく。一方で、楽しいあそびを見つけられない子どもは、その時間を一人でなんとなく寂しい思いで過ごしているのかもしれない。このような子どもにとって、鉄道サークルが楽しみなあそびとなるのである。

四つ目の意義としては、友達と一緒にあそぶことの楽しさに気付けることである。エピソード④で示したように、鉄道サークルをきっかけとして、新たなつながる先¹¹をつくり出そうとする子どもが現れた。鉄道サークルを体験した子どもが、自分の好きな仮面ライダーあそびを一人でするのではなく、仮面ライダーサークルとして誰かと一緒にしたいと考えた。このような考えは、鉄道サークルを通して、友達と一緒にあそぶことの楽しさを体験することによって生まれたのである。つながる先が、他者と楽しく過ごすことができ、その楽しさに気付く場となっていることがわかる。

五つ目の意義としては、あそびの選択肢がふえることである。エピソード⑥では、鉄道のこととはあまり知らない桐山会員が参加していた。鉄道サークルの活動内容に、一つでもやってみようと思えるような活動があれば、そこに加わることができる。

幼稚園をフィールドとした研究において、須永美紀は「つながるための試行過程には、最初の段階として、特定の他者を志向するのではなく、興味をもったことをしている友だちとその『あそびそのもの』を『自分もやりたい』という『あそび志向』とでもいうべき状態が見られた」と指摘している¹²。子ども同士をつなげるために、まずは、子ども自身が「あそびそのもの」を「自分もやりたい」と思えるようなあそびを提供することが、保育者には求められている。選択肢が一つふえただけなのだが、鉄道サークルでは、活動内容に様々なものを取り入れることができる。これによって、子どもが「あそびそのもの」を「自分もやりたい」という気持ちになる可能性をひろげることができる。

6. おわりに

本研究では、鉄道サークルの学童保育実践を通して、つながる先をつくることの意義について検討してきた。保育者として、子ども同士をつないでいくにあたり、つながる先をつくることの重要性を確認することができた。

保育者が子どもをいかにして、つながる先へと案内するのが大切である。子ども同士をつなぐにあたり、子どもが「ちょっとやってみようかな」という思いになるように、ゆるやかにつながる先¹³となるような工夫が必要である。保育者が子どもの「ちょっとやってみようかな」という思いを引き起こすようなつながる先をつくることで、子どもがつながる先へとつながり、そして、子ども同士のつながりができていくのである。

注

- 1 佐藤暁『子どもも教師も元気が出る授業づくりの実践ライブ』学研教育出版、2009、pp. 44-45。
- 2 小川博久「今、遊びを問うこととは」小川博久編著『「遊び」の探究』生活ジャーナル、2001、pp. 1-8。
- 3 鉄道サークル会長とは、鉄道サークルを中心的にひっぱっていく鉄道サークル会員のことである。会長は、鉄道サークルの活動の一つである鉄道サークル会長選挙において、鉄道サークル会員の立候補者のなかから選ばれる。
- 4 宇田川は「共感的他者との出会いによって、子どもたちは、今度は、自分たち自身が共感的他者となり、その相手と『共に』の世界をつくり出すための協働をはじめ」(p.107)としている。宇田川久美子「『共に』の世界を生み出す共感—自閉傾向のある子どもの育ちを支えたもの」佐伯胖編『共感—育ち合う保育のなかで』ミネルヴァ書房、2007、pp. 74-108。
- 5 エピソード記述については、鯨岡(2005)を参考にした。鯨岡峻『エピソード記述入門—実践と質的研究のために』東京大学出版会、2005。
- 6 同上、p. 16。
- 7 佐藤暁「実践する『身体』による物語りの技法」『発達』第133号、ミネルヴァ書房、2013、pp. 104-111。
- 8 佐藤は「小学生くらいになると、ある程度ルールのある遊びやゲームが媒介になるとし、授業の場合は課題が媒介となるとしている。これらの課題を媒介させて子ども同士がつながっていくとしている。このためには、媒介となる課題と子どもがしっかりと結びついていなくてはならないとしている。また、そのためには、その課題が子どもにとって『学ぶ値打ちのある課題』でなければいけない」としている。佐藤暁『子どもも教師も元気が出る授業づくりの実践ライブ』前掲書、pp. 176-177。
- 9 矢野智司『意味が躍動する生とは何か—遊ぶ子どもの人間学』世織書房、2006、p.120。
- 10 この学童保育所内では、保護者を招待し、年に1回ステージ発表を行っている。ここでは、子どもがけん玉・コマ・ダンス・劇・手品・楽器演奏等を披露している。この発表の一つに鉄道サークルのステージ発表の時間が設定されている。直前の時期には、鉄道サークルの活動内容にステージの準備や発表練習がもりこまれる。
- 11 この学童保育所において、仮面ライダーサークル・まんがサークル・ゴーヤサークル等の新たなつながる先

としてのサークルが誕生していた。仮面ライダーサークルでは、筆者とは別の仮面ライダー好きな保育者とともに、その周囲に仮面ライダー好きな子どもが集まっていた。つまり、新たなつながる先としての仮面ライダーサークルにおいて、新たな子ども同士のつながりができていたのである。

¹² 須永は「『あそび志向』段階が、他者と『つながる』ための重要な役割を果たしているとし『あそびそのものに』ひきつけられ、結果として、その場を共有した相手とのかかわりが生まれるという道すじが存在する可能性が示唆される」としている。須永美紀「友だちとの関係構築過程における『あそび志向』段階の可能性—相手と『つながる』ということに注目して」『保育学研究』第43巻、第1号、2005、pp. 39-50。

¹³ 林は、ゆるやかにつながる先とは、子どもが「ちょっとやってみようかな」というような思いになるようなものであるとしている。遊び・取り組みをゆるやかにつながる先となるように工夫していくことの重要性を指摘している。林幹士「学童保育における保育者は子ども同士をどのようにつなげようとしているのか?—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた保育者の語り分析から—」日本保育学会『保育学研究』第51巻、第2号、2013、pp. 97-108。

(付記) 筆者については、エピソード内において私やまあぼとして表記した。なお児童名・保育者名は匿名であり、状況に応じて、会員・会長等の表記を用いている。